

淀川水系流域委員会 第 28 回猪名川 (2005. 9. 11 開催) 結果報告		2005. 10. 7 庶務発信
開催日時 :	2005 年 9 月 11 日 (日) 14 : 00 ~ 17 : 05	
場 所 :	OMMビル 2 階 会議室	
参加者数 :	委員 14 名、河川管理者 (指定席) 10 名、一般傍聴者 (マスコミ含む) 53 名	
<p>1. 決定事項 : 特になし</p> <p>2. 審議の概要</p> <p>○余野川ダムに関する調査検討結果について</p> <p>審議資料 1-3「余野川ダムの調査検討 (とりまとめ)」について、委員と河川管理者の意見交換がなされた。主な意見交換は以下の通り (例示)。</p> <p>①対象とする洪水について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 狭窄部上流域の目標として既往第 2 位と対象にしたのは何故か (審議資料 1-3 P3)。第 1 位の洪水は特異であるために検討対象から外しているが、どの程度特異なのか。 <ul style="list-style-type: none"> ← 当初は既往最大洪水を対象としていたが、有効な対策を組み合わせても大幅な被害軽減は難しい。また、1 山目が猪名川上流域、2 山目が一庫大路次川流域に降った特異な降雨だった。委員会から目標としては過大すぎるという意見も頂いた (河川管理者)。 ・ 1/4000 とされている既往最大洪水が、本当に特異な雨なのかどうか。自然の警告を無視すべきではない。まずは水系全体の目標とする洪水を定めて、それに対して戦略を立てる必要があるのではないか。 <ul style="list-style-type: none"> ← 従来の工事実施基本計画では銀橋地点で既往最大洪水程度が目標となっている。現在策定を進めている河川整備基本方針においても、この目標を踏襲する考えだ。将来的な目標として既往最大洪水を対象にしているが、今後 20~30 年では既往第 2 位を目標に安全度を図っていく (河川管理者)。 ・ 既往最大洪水を対象にした場合に、余野川ダムでどれくらい効果があるのかを検討する必要がある。検討結果が既往第 2 位洪水と同じであっても、検討すべきだ。 <ul style="list-style-type: none"> ← 銀橋上流に対する余野川ダムの効果は、既往最大であっても既往第 2 位であってもほとんど変わらない。開削後の下流域に対する余野川ダムの効果は、既往最大洪水であれば、余野川ダムがあってもなくても、堤防天端一余裕高を下回る (河川管理者)。 ・ あらゆる洪水に対して壊滅的な被害を出さないことが流域全体の最終的な目標だ。今回の整備計画で猪名川流域において優先して取り組むべきことは、銀橋上流の浸水被害軽減であり、その対象は既往第 2 位洪水だと考えている。当然、銀橋上流の浸水被害軽減対策として、既往第 2 位で十分だとは思っていない。長期的な計画では既往最大洪水に対応していくことになっている。既往第 2 位はステップの 1 つだ。また、余野川ダムがあれば猪名川下流域の水位低下効果はあるが (審議資料 1-3 P16)、この効果があるから余野川ダムを優先して実施すべきだとは考えていない (河川管理者)。 ・ 前期委員会で意見交換をしてきた結果、「あらゆる降雨に対して破堤による壊滅的な被害を回避する」という治水の基本的な理念が、委員会と河川管理者の共通した考え方になった。ただし河川管理者は、例外的に狭窄部上流は対象降雨を設定する必要があるとしたため、委員会と河川管理者で議論してきた。委員会は、実現可能性を考えて、実績最大降雨にすべきだと意見を述べた。従来の整備ではかなり大きな降雨を対象にしてきたために達成率がかなり低い。今後 20~30 年を対象とした整備計画では、対象降雨を大きくしても達成できなければむしろ被害が出る。一方、河川管理者は、場所によって違うが、実績最大降雨の引き伸ばしを対象に検討を進めてきた。もちろん、実績最大を越える降雨によって超過洪水が発生する可能性はあるが、その場合は、破堤による壊滅的な被害を避けるために河道対策や堤防補強をしていくべきだという考え方を委員会は示している。整備計画の中身を考える際に、河川管理者にあらゆる降雨パターンを示してもらっても混乱するだけではないか。あらゆるパターンを示してもらうことが本当に有益なのかどうかを考えないといけない。 <ul style="list-style-type: none"> ← 他の水系では、流域全体で目標とする降雨や洪水を決めている場合が多い。まず目標を決めて、その目標に向かってステップごとに進めていくべきだ (委員)。 		

②堤防強化について

- ・審議資料 1-3 P18 で堤防強化の実施場所が示されているが、整備の優先順位や浸透・侵食に対する危険度が分かるようにしてほしい。
 - ←堤防天端—余裕高の水位で堤防の安全性を評価した。緊急堤防補強区間 5km の中で安全性が確保されていない箇所を整備を実施する。残る区間についても詳細点検に着手しており、安全性が確保されていない箇所では緊急補強区間に引き続き整備を実施していく。工事期間は約 10 年と考えている。一連区間の築堤は、平成 20 年度に完成を目標にしている（河川管理者）。
- ・余野川ダム残事業費 290 億円よりも河道掘削案 160 億円の方が経済的だということだが、河道掘削効果の発現時期が示せなければ、余野川ダムとの比較はできないのではないか。
 - ←銀橋上流対策として、一庫ダム・余野川ダムによる対策案と銀橋開削・猪名川下流の河道整備による対策案を検討した結果、効果面、全体コスト面から後者が有利であると考えている（前者は約 1080 億円、後者は約 260 億円）。効果の発現時期についても、後者の対策の方が有利だと考えている。具体的なスケジュールはなるべく早く示したい（河川管理者）。

③環境について

- ・掘削場所としてどこを選択するかが大きな問題だ。河川管理者は中州を中心に掘削する考えだが、猪名川には高水敷の公園が多い。中州だけではなく、高水敷を含めて考えないといけない。樹林が繁茂している箇所は冠水する程度まで掘削すればよいのではないか。
- ・治水面の効果がある河道掘削と河川環境のための河道掘削は違ってくるだろう。そのスタンスが明らかではない。場所によって、治水優先、環境優先の場所があるだろう（ゾーニングの考え方）。中州では、平常時の水位から飛び出している部分だけをカットする図が示されている、環境保全にとってはあまり意味がないと思う。どのようにして治水と環境保全を両立させていくか、明確にしていく必要がある。
- ・武庫川下流では、真っ平らに掘削している。このやり方でよいとおもう。やがて小さな蛇行ができ、自然の川になる。隠し護岸という考え方もある。造園的にならないようにしていくべきだ。
- ・河道掘削は、まず治水を優先して決めてほしい。その次に環境面から考えた河道掘削を検討すべきだ。

3. 一般傍聴者からの意見聴取：一般傍聴者 5 名からの発言があった。主な意見は以下の通り（例示）。

- ・猪名川は高水敷の利用率が高い。河道掘削は河川敷利用の縮小とセットで考えるべき。今回の審議事項はこれまでの部会やWGで検討したことだ。審議内容をよく把握して頂けるよう対策を考えてほしい。
- ・前半の審議がうまくいっていない印象を受けた。河川管理者は審議事項を絞って委員会に示すべき。河川管理者には的確に答えて頂きたい。河川整備計画の目標をまず定めて、整備の優先順位を決めて、審議をしてほしい。余野川ダムの地元は、ダム中止の際には 1000 億円の補償を考えている。銀橋上流の対策を優先するのではなく、猪名川全体を考えて頂きたい。委員会には地元を是非見て頂きたい。また、軍行橋以下でかなりの河川改修をしないといけないという河川管理者の説明を受けた。私は、この整備によって河川環境に多大な影響が出ると思う。
- ・河川管理者は自信を持って説明してほしい。これまでに、多田地区の浸水被害についてかなりの時間をかけて検討してきた。余野川ダムは多田地区の浸水被害軽減には効果がないと判明してからも、何とか余野川ダムで対応できないかと考えてきた経緯をわかるように説明をして頂きたい。
- ・地元の補償等には税金がつき込まれる。地方自治体との連携もうまくいっていない。河川管理者や委員会は地元住民に向けた審議をおねがいしたい。
- ・新規委員は資料を読んだ上で議論をして頂きたい。引き伸ばし率と被害金額を示した資料も示されている。どんな雨が来ても、越水しても破堤しない堤防補強とソフト面での対応をしていこうという議論もしてきた。過去の審議をきちんと引き継いだ議論をして欲しい。河川管理者もこれまでの説明を理解した上で受け答えをしてほしい

※このお知らせは委員の皆様に必要な決定事項などの会議の結果を迅速にお知らせするため、庶務から発信させていただくものです。